

# アイディアの宝船

## 『日本語中級 J501』で教える

Ja-Net 季刊ジャネット No.32 別冊

- 第9課「李良枝からの電話」での活動の試み.....1
- 『J501』を使った授業.....2

2005年1月25日発行

スリーイーネットワーク

### 第9課「李良枝からの電話」での活動の試み

東京日本語文化学校 金子史朗

#### 1. はじめに

『J501』は難しいテキストだという声をよく聞きます。これは学習者からの声ではなく、教師たちからの声です。確かに教科書の中心となるべき読み物は、さまざまなタイプの文章が出てきており、押さえどころをつかむのが難しいものもあります。このように教師にとって決して「くみしやすし」とはいかない教科書を使って、いかに中上級の学習者に有益な授業を提供できるかというのは、ひとえに教師の工夫にかかってくるのではないかと思います。私たちの学校でも各課でさまざまな試みがなされています。その1つとして、ここでは第9課「李良枝からの電話」の「話してみよう」での試みを紹介します。

#### 2. クラス概要

学習者：中上級レベル 10名（韓国9名、中国1名）

授業時間：45分×2コマ

この時間までに第9課の「Grammar Notes」、本文の読解（「読み方のくふう」「Q&A」）、「練習B」まで終えている。

活動目的：「自分の居場所」を考えることによって、自分と周囲の環境の関係、アイデンティティについて考えてみる。

使用教材：安達昇 編・著『みんなとの人間関係を豊かにする教材55』（小学館）より第3章〈20〉「わたしの居場所」

#### 3. 授業の手順

##### ①ウォーミングアップ

クラス全体に「今、みんなはどんな集団、グループに所属しているか」と問いかけ、何人かの学習者に言ってもらおう。この時、クラスや学校、アルバイトなどはっきりと集団として形作られるものだけに限らないということも言う。

##### ②個別活動

ワークシート（右）を配り、花の中心に自分の名前、花びらの部分に集団の名前とそこにいる時の気持ちを書き込んでいってもらおう。書き込みが終わったら、自分が心地よく感じたり、生き生きとしていられる居場所に好きな色を塗ってもらおう。

##### ③グループ活動

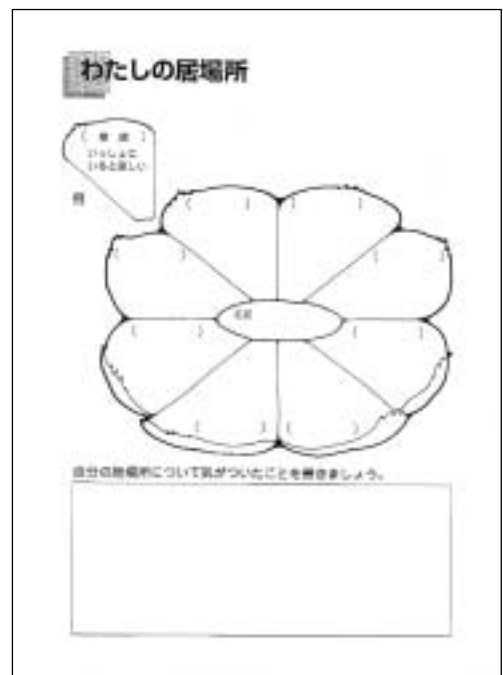
5人ずつのグループを作り、色を塗った理由やそこにいる時の気持ちをグループの中で発表してもらおう。この時間が「話す」活動としてのメインになるので、できるだけグループの中で感想や質問、意見などを言い合うようにする。

##### ④まとめ

この活動の中で気づいたことなどを言ってもらおう。教科書の本文の内容を思い出させ、「在日」という立場におかれている人たちのことを考えてみる。

#### 4. 反省

自分自身やクラスメートの身近な話題を取りあげた活動だったこともあってか、グループ内での発話は引き出せたのですが、肝心の「アイデンティティを考える」というところまでの深さには達しなかったという点で課題が残りました。その原因としては、「集団」を学生時代のクラブ活動やサークル等のような具体



個別活動で使用したワークシート

安達昇 編・著『みんなとの人間関係を豊かにする教材55』（小学館）より

的に“形作られたグループ”としてのみ考えてしまい、発想の広がりや欠けていたことがあります。ウォーミングアップの時に「集団」というものをもっと柔軟にとらえるように例を出しながら促していくことが必要だと感じました。「JRを使う人たち」、「～語を話す人たち」、「～が好きな人たち」等、より抽象的なものにこそ、この授業の目的に達するカギがあるような気がします。

## 5. 『J501』について

『J501』は難しい、と冒頭に書きましたが、このテキストは、教科書通りに淡々とやっていたのでは、学習者も教師もおもしろみを感じられないのではないかと思います。テキストに出ていることをなぞるのではなく、それをもとに自由な発想で思い切った工夫をするといった働きかけが必要なのではないでしょうか。その働きかけこそが授業のダイナミズムであり、学習者をひきつけるものになるのだと思います。このような教師の働きかけを受け入れる幅の広さと奥深さがこの『J501』にはあると思います。使い方は難しいけれども、こちらの工夫次第で強く学習者をひきつけられる『J501』の可能性を信じ、今後もさまざまな試みに取り組んでいきたいと考えています。

# 『J501』を使った授業

ヨシダ日本語学院 一条初枝

## 1. クラスの背景

私の勤務するヨシダ日本語学院では、ここ数年の間に非漢字圏の学習者が半数を占めるまでになりました。しかも、彼らは日本での進学を熱望しています。このような変化に対応すべく、教師間でさまざまなことが議論され、中級レベルの教科書として『J301』『J501』を使うことになりました。『J301』『J501』が、韓国語・中国語・英語の各国語版を備えていることも、私たちの学校の授業にとって大きな力になりました。

テキストに提示されている課のポイントを踏まえ、課の目標を立て、そのアプローチの方法を組み立てた授業計画が4ページの表です。漢字圏の学生との混合クラスであってもスムーズな授業の展開ができるよう、読み・書きだけに学習の比重をおくのではなく、グループワークと個人の発表の場を数多く設定した、いわば「活動」中心の授業計画となっています。

## 2. 第1課「文化と偏見」の授業例

### ●クラスの概要と授業の流れ

目標：異文化に対する自分の中の偏見や一般化に気づく。  
一般論と個別の意見とを区別し、構成を考えながら文章で自分の意見を表現する。

学習者：中級Ⅱレベル  
(初級9か月＋初中級3か月 / 学習時間約800時間程度)  
13名  
(韓国6名 ネパール4名 イタリア・セルビア・シンガポール各1名)

時間数：1日3コマ(1コマ45分) × 6日

	テキスト	授業活動
1日目	読むまえに→Grammar Notes 練習A	ブレインストーミング
2日目	本文読解→読み方のくふう→Q&A	
3日目	練習B→ことばのネットワーク	
4日目	話してみよう	初日の作業から偏見を見つける。タスクシート①に記入、発表
5日目	書いてみよう	タスクシート②を使って下書き →作文(600字)「異文化理解を考える」
6日目	作文の講評・誤文訂正など	

## 3. 授業活動

1日目「読むまえに」、4日目「話してみよう」、5日目「書いてみよう」で行った活動について紹介します。

### ●「読むまえに」

企画会議や問題点のあぶり出しなどでよく用いられている発想法に「KJ法」があります。その手法を利用してブレインストーミングを行います。各国のイメージをキーワードで表すというものです。

① 学生はいくつかのグループに分かれます。各グループで、ある1つの国についてそれぞれ自由に思いついた言葉を付箋に書き、それを大きな模造紙に貼っていきます。国の選び方は自由ですが、クラスにその国から来た学生がいたほうが盛り上がり

ます。今回は、「イタリア」「ネパール」「シンガポール」が選ばれました。

- ② それぞれ出されたさまざまなキーワードを、大きなくりにしていきます。そして、そのくりに「題」をつけていきます。たとえば、「イタリア」のグループでは、『ぜひ行きたい国』『有名なこと』『さんねん』そして、『警告』という題がつけられました。「ネパール」では、『宗教』『自然』『生活』『食べ物』『性格』、「シンガポール」では、『食べ物』『イメージ』『国のようす』『きせつ(季節)』がつけられていました。これらの言葉もグループの中で出されたキーワードをもとに学生たちが主体的につけた題です。
- ③ グループごとに発表します。ほかのグループではどのようなことが話し合われていたのかわかりませんから、学生たちは発表に興味津々です。また、自分の国が発表される立場にある人は、他国から自分たちがどう見られているのかわかりますし、一方、その国以外の学生にとっては、たとえばイタリアという国については発表と同じように思っているけれども、イタリア人のクラスメートがその発表の内容に当てはまるかというところとそうとはいえないんじゃないかといったズレを感じることにとなり、実はその点がこの発表の「仕掛け」でもあるわけです。つまり、自分の中のある種の偏見、一般化というもの存在に気づくという「仕掛け」です。

●「話してみよう」

ここでは、タスクシート①を記入した後、発表を行います。

●「書いてみよう」

- ① 5日目、いよいよ作文を書く日です。いきなり書きはじめるのではなく、構成の見本となるモデル文を示したタスクシート②に沿って構成に注意しながら下書きをします。ここでは特に「もちろん」～「しかし」を使って、『～(一般論など)は「もちろん」そうだ。「しかし」(自分の考えは)～だ。』という文を書くよう指導していきます。
- ② 6日目は作文の講評をします。講評では、名前を消して誰が書いたかわからないようにした作文を学生分コピーし、クラスの全員で間違いを直したり、ほめたりします。クラスの状況によっては、この作業をグループワークにする場合もあります。今回のように構成を重視した作文では、全体の構成にポイントをおいてみていきます。

タスクシート① 学生の記入例

誰が書いたかわからないために、間違いの指摘が自由にできます。さらに、ふだん口が重くて日本語がよくできないと思われる学生が、書くということにかけては素晴らしい能力を発揮するということがわかって一目置かれるようになるなど、クラスのメンバーとの関係がよくなるということもありました。

また、これを繰り返しているうちに、文章の個性に互いに気がつきはじめて、これは誰々の作文、というように声が上がったりし、そうすると、指摘された学生は恥ずかしがるどころか当ててもらってうれしいというような顔をすることがあります。実は、このような作文の講評の過程が、個人の作文能力の向上にもクラス運営にも大きく影響するのではないかと思います。

このことばに注意して、下の文章の ①～⑤ と同じ構成で文を書いてみましょう。

① 報道によると、日本での外国人による犯罪が増えているらしい。新聞やテレビのニュースなどでは、毎日のように外国人による犯罪が報道されている。

② これらの報道から、まるで日本に住む外国人のほとんどが犯罪者であるかのようなメッセージを受け取ってしまうことがないか心配だ。  
そのことは、やがて、「普通の」「善良な」日本人たちに対して、「外国人は怖い→外国人は日本にいないほうがいい」といった考えを植え付けてしまうのではないかと恐ろしいと感じる。

③ もちろん、それらの報道は「うそ」ではないだろう。確かに外国人による犯罪は増え続け、日本の都市はますます治安が悪くなっている。

④ しかし、「うそ」ではないとしても「事実」をすべて伝えているわけではない。たとえば、日本という異国で苦勞しながら生活している「普通の」「善良な」外国人について、私たちはどれだけ多くのことを知っているだろう。  
どの国にもいい人もいれば悪い人もいて、そういうあたりまえの事実が伝えられる機会は、残念ながらそう多くはない。

⑤ 情報化社会といわれて久しいが、その結果、実は 知りたいことからは遠ざけられ、誰かに都合のいい情報だけを与えられているに過ぎないという危険も多くなっている。「外国人による犯罪が増えている」というその一つのニュースだけが大きく取り上げられ、声高に叫ばれているとすれば、それは何者かによる「情報操作」にはかならない。  
私たちが何かについて正しく公平な判断をしたいと望むなら、私たちが知っている情報がすべてではなく、「知らないこと」あるいは「知らされていないこと」があるのかもしれないと疑ってみることが必要ではないだろうか。

①	テーマ・話題の導入部：「 」
②	①に対する自分の意見
③	自分の意見への予想される反論・反対の立場からの事実など もちろん
④	③：反論に対する自分の意見の展開 しかし
⑤	結論

タスクシート② モデル文は教師が作成する。

す。そして、この方法をうまくクラスに取り込むことでクラス全体の仲間意識のようなものが育まれていくと、何よりも学生たち自身の学生生活が楽しいものになるような気がしています。

#### 4. まとめ

『J501』を使った授業も1年半になりました。この教科書を使うことで教師は変化していくことを求められました。

なぜなら、もともと非漢字圏の学習者にどう対応していくかを考え、活動を中心に進めていこうと決めたわけですが、この選択をした以上、教科書通りになぞっているだけでは授業がうまく進められないことに気づかされたからだと思います。個人の活動であれ、グループワークであれ、学習者の活発な授業活動を望むなら、まず教師自らが「活動」しなければなりません。教師自らグループの中で共同作業を進めていくことの楽しさと苦しさを実感するのも必要なことかもしれないと思います。

学習者と教師との協働作業のなかからどんなものが生まれ出てくるか、それを楽しみに授業計画を考える日々です。

授業計画表 (抜粋)

課	課のポイント	活動例	反省・感想
2課 マナーもいっしょに「携帯」	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題を提示してその事例を挙げ、自分の意見を述べる。</li> <li>携帯電話の使用によって生じている社会問題を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スピーチ：問題提起・事例・意見の順に文章をまとめ、覚えてスピーチする。→ビデオに撮り、翌日これをもとに講評する。</li> <li>作文：問題提起の作文(新聞の投書のようなもの)を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ビデオ撮りの日に欠席してしまう学生への対応をどうするか。</li> <li>覚えて話せる学生は少ない。読んでいるだけの学生が多かった。</li> </ul>
6課 ひとしずくの水にあふれる個性	<ul style="list-style-type: none"> <li>図や見出しなどから文章の内容を推測して読む。</li> </ul>	<p><b>活動例1</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>図や見出しから内容を推測する。</li> <li>新聞作り：いくつかのグループに分かれてテーマを決める。取材・インターネット・アンケートなどで調べた結果を記事に書き、まとめて新聞にする。</li> </ul> <p><b>活動例2</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>進学志望者のための小論文クラスの考え方を取り入れた授業例</li> <li>①「セヴァン・カリス・スズキ12歳のときのスピーチ」(地球環境サミット)を読む。</li> <li>②ディベート：「開発か、自然保護か」</li> <li>③作文(600字)：「地球の環境を守るためにあなたができること」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>とてもおもしろい新聞ができた。</li> </ul> <p><b>初めて日本語でディベートを行った学生の感想</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>もっとやりたい。</li> <li>言いたいことが伝えられない、もどかしい。</li> <li>本当は違うことが伝えたいのに、うまく表現できないために意見が食い違ってしまう。</li> </ul> <p><b>教師の感想</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>上級の小論文クラスとは語彙力・表現力の点でずいぶん違うものとなった。</li> <li>学生たちに「ことばの持つ力」を体現してもらうことができた。</li> <li>いい作文が書けていたが、情報・知識が少ないために限界があった。</li> </ul>
10課 ゾウの時間 ネズミの時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験や調査に関する報告を読み取り、表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ビデオ鑑賞と作文</li> <li>留学生の日本での生活を追ったようなドキュメンタリービデオを見せ、自分の留学生生活を振り返る。中級修了時の総まとめとして自分自身の留学生生活を文章にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際にはTVドラマ「北の国から〜89帰郷」を用いた。130分を越す長いものであるが、16歳の少年が北海道から上京して、仕事をしながら定時制高校に通う姿が、留学生たちの生活と重ね合わせやすいのではということ選ばれた。みな心に残るいい作文を書いている。</li> </ul>

#### 勉強会 中級の教室活動を考える - 『日本語中級J501』を使って -

今回ご執筆いただいた先生をお招きした勉強会を予定しています。中上級の学習者に有益な授業をどう提供できるか、『日本語中級J501』を使って、中級の教室活動の可能性を一緒に考えませんか。

日程：2005年3月26日(土) 13:30~16:30 場所：アジア文化会館129号室 東京都文京区本駒込2-12-13 TEL:03-3946-4121

定員：40名 費用：500円

問合せ/申し込み：スリーエーネットワーク講座係 TEL:03-3292-6410 FAX:03-3292-6194 e-mail: ja-net@3anet.co.jp